

星のある風景： 夏目漱石の『坑夫』、「夢十夜」、「思い出すことなど」

涌 井 隆

1.

夏目漱石の『坑夫』（1908年）は十九歳の若者が死ぬ覚悟で家出をし、銅山の中に入って自殺を試みようとするが果たせず、結局飯場の帳簿係として数ヶ月働いた後東京に帰る決心をするという話である。切羽詰った青年のこのころの動きを中年の語り手が距離を置いて語る。時におどけ時に諧謔的になる語り口は落語に大きく影響を受けている漱石自身と看做すことも出来ようが、小説の中では、中年になった元青年ということになっている。主人公の青年は長蔵という幹旋屋に出会い彼の後をついて銅山（足尾銅山）にたどり着く。その道行きの中に次の一節がある。（漱石全集第6巻67頁）

この状態でだいぶ来た。何里だか見当のつかないほど来た。夜道だから平生よりは、ただでさえ長く思われる上へ持ってきて（中略）それでも、生きてる証拠には、どうか、どうか、長蔵さんの尻を五六間と離れずに、やって来た。（中略）それにしても長蔵さんは、よく後が見えたもんだ。ことに夜中である。右も左も黒い木が空を見事に突っ切って、頭の上は細く上まで開いているなど、仰向いた時、始めて勘づくくらいな暗い路である。星明りと云うけれど、あまり便にゃならない。提灯なんか無論持ち合せようはずがない。

彼らが歩く山道には明かりがない。勿論、街灯や懐中電灯もない。正確にはどのくらいの暗さなのかははっきりとはわからないが、非常に暗い空の下では天の川の光は地面に影を作るほどの明るさなので、正に星明りに頼って歩いているのだろう。「星明り」という言葉は、21世紀の今となっては化石のような言葉である。オーストラリアの内陸部やチリの高原などに住んでいるのでなければその意味するところを誰も知らない。しかし、上の一節で青年が経験しているのは正にその星明りだろう。しかも、星明りがあっても、道の両端に木が高く植えられているので、地面や自分の体も見えないほどの真っ暗闇であるはずだ。

『坑夫』という小説は、光と暗闇が大きなモチーフとなっている。主人公の青年は、豊かな家庭で育ちながら女性問題で家出を試みる。その頃の心境が次の一節に読み取れる。（漱石全集第6巻8頁）ここでの闇はいわゆる心の闇、比喩的な闇である。

この曇った世界が曇ったなりはびこって、定業の尽きるまで行く手を塞いでいてはたまらない。留まった片足を不安の念に駆られて一歩前へ出すと、一歩不安の中へ踏み込んだ訳になる。不安に追い懸けられ、不安に引っ張られて、やむを得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒が明くはずがない。生涯片づかない不安の中を歩いて行くんだ。とても事に曇ったものが、いっそだんだん暗くなってくれればいい。暗くなった所をまた暗い方へと踏み出して行ったら、遠からず世界が闇になって、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば気楽なものだ。

「自分の眼で自分の身体が見えなくなるなるだろう」というのは、銅坑に入ることになった後半への伏線であるが、銅山に向けて山道を歩いている時にも自分の眼で自分の身体が見えないくらい暗いのは上で見たとおりだ。その暗闇を抜けると足尾に着き、そこには電燈がともっている。新しい料理屋があり郵便局があり、「白粉をつけた新しい女までいる。」しかし、一旦、銅坑の中に入るとところどころに電燈はあるが、カンテラがないと真っ暗闇である。銅坑を下っていく途中で入り口を振り返るとそれは満月のように見える。『坑夫』という作品は、様々な解釈を許容する。「明」と「暗」という観点から見ると、主人公である青年が、「明」である東京から「暗」を求めて出走する過程で、銅山までの「暗」い山道を通り、明るい足尾町に一時浮上するが、再度「暗」い銅坑にもぐり、そこで自殺を試みるが果たせず、浮上して結局東京に戻るという話であると要約できるだろう。

2.

日本において最初にアーク灯の火が点されたのは1878年、エジソンが白熱電球を発明したのは1879年、日本初の電気事業会社（東京電燈）が開業したのは1886年、日本初の火力発電所が東京に完成したのはその翌年である。⁽¹⁾『坑夫』の執筆はさらに時代が下るが、栃木の山道から見あげる夜空は、21世紀の現在とは全く比べ物にならないくらい暗かったのだろう。太陽光が届かない夜の間の空の明るさは様々な要因で決まる。地上に設置されている人口光がそのまま地上をスポット的に照らすだけなら、それほど空は明るくならないのだが、大抵は空の方向に向かって光が漏れるから、その光が空気中のちりや水滴に反射して、空を明るくする。今日では、東京の中心は晴れていて透明度が高い夜でも1等星が見えるかみえないかくらいの明るさになっている。夜の間空が明るいというのは石油資源の浪費であるばかりでなく生命体に悪い影響を及ぼすことが様々な研究で分かってきた。その悪い側面を捉えて「光害」という用語が造られた。光

害を最も嫌うのは天文学者であり、アマチュア天文家である。プロの天文学者の人口は世界的にもそれほど多くないので、光害を問題にして社会的な活動をしている人々の多くがアマチュア天文家であるというのが現状である。⁽²⁾

星空を見てどの程度の光害があるのか客観的に測定する方法は存在しない。別に決まったやり方は存在しないが、アマチュア天文家はペガサス座の大四角形の中に幾つ星が見えるか数えたり、プレヤデス星団（すばる）を見てどれだけ暗い星が見えるかを調べたりしてその日の空の暗さを測る。プレヤデス星団は日本では六連星（むつらぼし）と呼ぶところがあり、英語の俗称はセブンシスターズなので、通常6から7個は楽に見える。八つ目（あるいは九つ目）になるおうし座21星（21Tau）ステロペが見えれば5.8等星まで見えていることになる。現在の日本ではそのくらいの暗さを得るためには人里離れた山奥に行かなければならない。プラネタリウムでは肉眼で見えるもっとも暗い星は6等星であるという解説がなされることが多く、教科書などを通じて広く流布している。しかし、実際は、光害が全くないところに行くと、8等星まで見えてしまう。アマチュア天文家向けの雑誌“Sky and Telescope”誌の2001年2月号に、John E. Bortleは彼自身の経験に基づいて光害の尺度を発表した。クラス1からクラス9まで9段階に分かれており、一番暗いクラス1が光害が皆無の環境である。次に、アマチュア天文家安田俊一が抜粋翻訳したものに筆者がところどころ手を加えたものを引く。⁽³⁾

クラス1：最高の暗さ

黄道光、対日照、黄道帯がすべて見える。黄道光だけでなく、黄道帯は完全に繋がって見える。M33は直視で明白に肉眼で見える天体である。さそり座といて座の天の川は明白に陰を地面に映し出す。肉眼ではそらし目でなくても7.6等から8.0等まで努力なしでの極限等級である。木星や金星の存在は空の状態を悪化させるほどの空である。夜光（とても淡いがハッキリ地平より15度以下くらいに見える）が分かる。口径32cmの望遠鏡では、17.5等級まで努力すれば見え、さらに50cmでは中倍率を使えば19等級まで見えてくる。もし木で囲まれた場所で見ているのであれば、望遠鏡や車はまったく見えない。この状態は観望者にとって涅槃だ!!!!

クラス2：本当に暗い空

夜光が淡いが見える。M33は直視でたやすく見える。夏の天の川の構造が肉眼でよく分かり、明るい部分を普通の双眼鏡で見ると大理石の模様のように複雑に見える。黄道光は青白い天の川と比較すると、ハッキリと黄色く十分明るい。空の雲は黒い陰としか

見えず、空にポツカリ空いた穴のように見える。貴方の望遠鏡や周りはハッキリ見えずバックが空の場合のみなんとか分かる。多くの M 天体である球状星団は肉眼で見える。肉眼の極限等級は 7.1 等級から 7.5 等級であり、32cm の望遠鏡では 16 等級から 17 等級に及ぶ。

クラス 3：田舎の空

光害が地平線に見える。雲は地平に近いものはなんとなく明るさを持って見える。天の川は複雑な構造で見え、M4、M5、M15、M22 などの球状星団は肉眼で明白に見える。M33 はそらし目では楽に見える。黄道光は春、秋では（水平から 60 度ほど立って夕方、夜明けの空に見える）、色を持って見れる。貴方の望遠鏡は 6～9m 離れても見えている。肉眼極限等級は 6.6～7.0 等級で、32cm 望遠鏡では 16 等級に及ぶ。

クラス 4：田舎と郊外の間

まさに光害が幾つかドーム状に見えている。黄道光はハッキリ見えるが、天頂を越えてまでは見えない。天の川が地平から昇ってくると印象的だが、複雑な構造は見えない。M33 は高度 50 度を越えて、ようやくそらし目で見えるが、厳しい。雲は光害がある方向であれば、淡く明かりを持つ。貴方の望遠鏡は離れても見えている。肉眼極限等級は 6.1～6.5 等級で、32cm 望遠鏡では中倍率を使うと 15.5 等級に及ぶ。

クラス 5：郊外の空

黄道光は春や秋の最高の空でようやく存在が分かる。天の川は淡く、地平に近いとよく分からない。光害はハッキリあるが、すべての方向ではない。全天において、雲はバックの空よりもハッキリ明るいのが分かる。肉眼極限等級は 5.6～6.0 等級で、32cm 望遠鏡では 14.5～15 等級に及ぶ。

クラス 6：明るい郊外の空

どんな良い晩でも黄道光の痕跡も分からない。天の川は天頂近くになってようやく分かる程度である。地平高度で 35 度くらいまでグレイな空である。雲は全天のどこでも明るい。望遠鏡やアクセサリを照明なく扱っても問題はないほど明るい。M33 は双眼鏡なしに見ることは不可能で、M31 はなんとか肉眼で分かる様子。肉眼極限等級は 5.5

等級で、32cm 望遠鏡では中倍率を使うと 14.0～14.5 等級に及ぶ。

クラス 7：郊外と市街地の中間

バックの夜空はもうグレイである。強い光害がすべての方向にある。天の川は見えないもしくはほとんど見えない。M44 や M31 は肉眼でかろうじて感じられる程度である。雲はハッキリ明るい。中口径の望遠鏡では明るい M 天体はおぼろげにゴーストのように見えている。肉眼極限等級は本気に見て 5.0 等級、32cm 望遠鏡では 14 等級に及ぶ。

クラス 8：市街地

夜空は白もしくはオレンジがかっていて、新聞の見出しは苦もなく読める。M31 や M44 は経験豊富な観測者で最高の夜でなんとかかろうじて分かり、明るい M 天体は中口径の望遠鏡であればなんとか検出できる。星座を構成する星は見えない場合があり分かりづらい。肉眼極限等級は 4.5 等級がベストで 32cm 望遠鏡では 13 等級までが限界。

クラス 9：都心

全天は明るく、天頂まで明るい。星座を形作る星はほとんど見えないことが多くかに座やうお座はまったく見えない。プレアデスは別にして M 天体は肉眼では見えない。月や惑星、明るい星団のみ見ることができる（貴方が見つけられれば）。肉眼極限等級は 4.0 等級以下である。

M33 というのはさんかく座にある銀河系宇宙である。我々が住む天の川銀河から見てアンドロメダ銀河（M31）に次いで近く、240 万光年離れている。これら三つの銀河系宇宙はローカルグループと呼ばれる銀河団に属している。そらし眼というのは、視野の中心部は網膜の感度がそれほど高くないので、暗い星雲などを見るときに、視野の周辺に置いて見る方法である。大抵の人は望遠鏡を覗いているうちに教わらなくても体得してしまう。32 センチ望遠鏡で見える極限等級が記載されているが、近年アマチュア向け望遠鏡の大口径化が進みこの辺りが標準的な口径となってきたからである。50 センチ級の望遠鏡を所有するアマチュアも増えている。Bortle のスケールではクラス 9 までになっているが、日本の都会に住むものにとってはクラス 10 がほしいところだ。ネット掲示板の議論によると日本では乗鞍高原や、大台ヶ原のようなアマチュア天文のメッカと呼ばれているところでも、クラス 3 に入るかどうか微妙であるようだ。⁽⁴⁾ オースト

ラリアでは都市から車で3時間以上離ればクラス2以上が楽に得られる。ここでいきなり漱石の『坑夫』に戻ると、あの山道の空の暗さは、クラス2以上だったはずである。道の両側には木が聳えて星明かりを遮断しており、自分の足元も見えない。正に銅山に入ったのと同様の状況だったはずだ。

3.

『坑夫』という文学作品をただ空の暗さという観点からのみ考察して来たが、漱石の関心が山道から見える星空にあったとは言えないので、ここであの道行きが作品の中で持つ意味についてもう一度考えてみたい。上で見たように、明るい東京からこころの闇に従い、自分が死ぬべき暗い場所を求めて出走した青年は、真っ暗闇の銅坑の中で自殺の直前まで行くが引き返す。銅山へ向かう途中の真っ暗闇の山道がその銅坑への伏線となっているのは明らかである。両者の間に違いがあるとすれば、山道の道行きでは、青年が幹旋屋の長蔵に自分の運命を預けているのに対して、銅坑の中で自殺を思いとどまるのは青年自身が自分の判断で下した決断であるという点である。青年が山道を歩く時、長蔵に騙されているのではないかという疑念を心の底に抱きつつも、自殺を覚悟して来ているという信念に立ち戻って、長蔵に運命を任せる。彼の足音を追い、彼に遅れば、数間先で待ってくれているのを期待して歩き続ける。勿論、長蔵は青年を銅山まで送り届けなければ口利き料を懐に入れることが出来ないので、青年のために足踏みするのは青年のためを思ってではなく、利己心に基づいている。『坑夫』の語り手は中年となって自分を振り返っている元青年なので、その辺の事情は承知しており、それゆえの抑えた語り口となっている。このように青年は、どんどん暗闇に向かって突き進むのであるが、最後の最後に自殺を断念する時の理由が興味深い。(漱石全集第6巻166頁)

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思って、体を心持後へ引いて、手の握をゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここで死んだってやえない。待て待て、出てから華厳の瀑へ行けと云う号令——号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡った。ゆるめかけた手が自然と緊まった。曇った眼が、急に明かるくなった。カンテラが燃えている。仰向くと、泥で濡れた梯子段が、暗い中まで続いている。是非共登らなければならぬ。もし途中で挫折すれば犬死になる。暗い坑で、誰も人のいない所で、日の目も見ないで、鉈と同じようにころげ落ちて、それっきり忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よし見つかっても半獣半人の坑夫共に軽蔑されるのは無念である。是非共登り切っちゃまわなければならぬ。カンテラは燃えている。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。坑の先には太陽が照り渡っている。

広い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあっても登らなければならない。

こんな暗闇で人知れず死んでいくのは耐えられない。華嚴の瀑の明るみに出て、そこで死んで新聞の片隅を飾るほうがよい！そのような奇妙な虚栄心に侵された青年の内面を語る語り手にアイロニーがあるのかどうか、わからない。その語り手は、『坑夫』という作品を、次のように、締めくくる。（漱石全集第6巻199頁）

町からは毎日毎日ポン引が椋鳥を引張って来る。子供も毎日連れられてくる。自分は四円の月給のうちで、菓子を買っては子供にやった。しかしその後東京へ帰ろうと思ってからは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に勤めた。そうして東京へ帰った。——自分が坑夫についての経験はこれだけである。そうしてみんな事実である。その証拠には小説になっていないんでも分る。この語り手は上に論じたように、中年になって過去を振り返っている元青年であると設定されているが、作者の漱石も大きい影を落としている。彼は、この作品が小説として出来損ないであることに積極的に価値を見出している。彼の議論は例えば次のようだ。（漱石全集第6巻88頁）

纏まりのつかない事実を事実のままに記すだけである。小説のように拵えたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

このような議論を語り手が作品の中で行うこと自体目新しくこの小説を実験的なものに行っているのだが、それでもこの小説の根本が写実主義であることには変わりがない。複数の研究者がすでに論じているように、この小説は、漱石が頭の中だけで作り上げたものではなく、たまたま彼に会いに来た元坑夫である荒川という男が素材を提供して生まれたものだ。そういう意味で「事実を事実のまま記」しているのである。このように漱石の作品の大多数は写実主義に基づいているが、そうでないものもある。例えば、「夢十夜」（1910）がそうだ。この作品は作者が実際に見た夢を記述したという設定なので、ある意味では写実的であると言えるのだろうが、現実世界では起こりそうにもない幻想的な出来事に満ち溢れている。次に、この作品に見られる星の記述を見てみよう。

4.

「第一夜」を要約するとこうなる。女が仰向けに寝ており、語り手が枕元に座っている。女はもう死ぬと言う。彼女は「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから」と言い、墓のそばで百年待つておればその時

いにくると言い残して死ぬ。語り手は、言われたとおり彼女を埋める。そうするとすばやく太陽が東から西に何度も沈み、百年が経ったのかと思われる頃、墓の近くに青い茎が伸び、真白な百合の花を咲かせ語り手に接吻する。物語は次の文章で閉じられる。「自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花卉に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。」

この話をどう解釈すればよいのか。語り手は彼女を待つ間に、ひょっとして騙されたのではないかという疑念を持つが最後まで待ったおかげで恋が成就したと考えればよいのだろうか。夢の中では抑圧された願いが実現するというのがフロイトの定式の一つであり、この夢はそれに適合していると考えるのが妥当だろうか。いずれにせよ、語り手が男で死んだ女に恋しているというのは間違いない。そしてこの物語が、恋人を信じ待つという普遍的なテーマについて語っているのも確かだ。100年という人間の時間的スケールから見れば長い時間が一瞬のうちに過ぎてしまうというのは、おとぎ話の常套であるとも考えられるが、宇宙的スケールの大きさを考えさせもする（とは言え、百年というのは137億年から見れば一瞬なのであるが。）

この写実ではありえない幻想的な物語の中で星はどのような役割を負っているのだろうか。もちろん今日の宇宙物理学が教える星ではありえない。「天から落ちて来る星の破片」はおそらく流星塵でも隕石のかけらでもなく、擬人化された星のかけらなのだろう。物語の最後に出てくる遠い空に見える暁の星はおそらく死んだ女の化身であって、語り手が集めて彼女の墓に墓標として置く星のかけらもそのように化身となって空に生まれ変わった者が地上に降臨した姿なのかもしれない。

ギリシア神話に限らず世界各地に存在する星をめぐる神話の殆どは、地上の人物（あるいは動物）が星となる話である。例えば、ギリシア神話ではふたご座のカストルとポルックスは、白鳥に化けたゼウスがスパルタ王妃レダに生ませた卵からかえった双子の兄弟とされる。二人は各地を武勇遍歴するが、ある日カストルは敵の弓矢に倒れ死んで冥界に行ってしまう。そこで不死身として生まれたポルックスは自分もカストルとともにいたいとゼウスに懇願したので、ゼウスはその願いを聞き届け、二人を夜空に送り、彼らはふたご座の最も明るい星として並んで輝くようになった。また、オーストラリアのあるアボリジニーの神話によると、プレヤデス星団（すばる）は、マヤマイという美しい七人姉妹で、蟻塚を棒でつついて蛹を探している時に、ワルマという勇士に後ろから襲いかかられ、七人のうち二人が囚われの身となってしまう。二人はこの強制された結婚から逃げ出そうと機会をうかがっていたところ、ある日、松の木を登って空に到達し、すでに星となっていた五人に再会する。この話とギリシア神話の七人姉妹の話は極似している。ワルマと殆ど同じ役回りを演じるのが同じく戦士であるオリオンである。

ギリシア神話では彼も空に打ち上げられ、空でも七人姉妹を追いかけることになる（プレヤデスはオリオン座より西に位置する。）ただ、日本では七夕伝説が根強く、漱石のこの小品の中で恋人が星になったりするのは、その連想が働いているのかもしれない。⁽⁵⁾

「夢十夜」にはもう一つ、星が出てくる小品がある。第七夜である。「何でも大きな船に乗っている。」と始まるこの小品は、『坑夫』と同じく自殺を扱っている。『坑夫』の主人公である青年は、自殺する寸前で梯子から手を離さず地上に戻ってくるが、この小品の主人公は、どちらの方向に向かっているかもわからない自分が乗っている船に不信感を持ち、海に身を投じてしまう。ただ、落下は緩やかで船が通り過ぎて行ったのを見届ける自殺者はまだ海面に届かないうちに物語が終わる。星についての言及を次に引く。（漱石全集第16巻43頁）

ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知ってるかと尋ねた。自分はつまらないから死のうとさえ思っている。天文学などを知る必要がない。黙っていた。するとその異人が金牛宮の頂にある七星の話をして聞かせた。そうして星も海もみんな神の作ったものだと言った。最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙っていた。

金牛宮というのは牡牛座のことで、七星というのはプレヤデス星団つまりすばるのことである。漱石の日記によると、彼はイギリスに向かう船の中で彼にキリスト教を布教しようとする船客につかまって悩ましい時間をすごしたらしいが、その時の経験がこの小品に反映されているかもしれない。⁽⁶⁾ 勿論、この語り手が海に身を投じることと彼が神の存在について懐疑的であることとは直接関係ない。

5.

次に、「思い出すことなど」（1911）という随筆について論じたい。この小品は1910年のいわゆる「修善寺の大患」の回想記で、胃潰瘍の療養に訪れていた伊豆から東京に戻った後書かれた。漱石は修善寺で800グラムの吐血を経験し、昏睡状態に陥り、医者達は臨終が近いと判断し最後の面会のために子供達が呼び寄せられたが、漱石は奇跡的に回復した。この小品は33の短い文章から構成され、それぞれ漢詩かあるいは俳句で締めくくられている。5番目の文章で漱石は、見舞ってくれた人たち、世話になった人たちに対して個別に近況を伝える礼状を出すべきところを、文芸欄の片隅に載せることになったと文筆を職業とする自分の立場を弁解している。28番目の文章では、病床で読んだオイッケンという哲学者を引用し、「たまたま文芸を好んで文芸を職業としながら、同時に職業としての文芸を忌んでいる余のごときものの注意を呼び起して、その批評心を刺戟する力は充分ある」と吐露しているので、このような赤裸々な私生活を露にしてまで、原稿料を稼ぐという自分の生業について、複雑な心境であることが分かる。

ただ、人生の危機に瀕して、俳句だの漢詩だのと浮世離れした世界に浸るのが彼の性向であったので、それを作品の中で実現でき、かつ原稿料を稼ぐことも出来たことは漱石にとっては歓迎すべきことであったのに違いない。ウィリアムおよびヘンリー・ジェイムズ、ニーチェ、ドストエフスキ、天文学、宇宙論、物理学、心靈学、進化論、職業論など、漱石が扱う主題は多岐に渡っている。自分の病状を詳細に記述し、様々な主題について縦横無尽に論じ、そして一見脈絡も何もないようにみえる俳句や漢詩で文章を締めくくる。「思い出すことなど」は奇妙だが同時に魅力的な小品である。

この作品には星や天文学についての言及が幾つかある。まず、天の川を詠った俳句が二句出てくる。

別るるや夢一筋の天の川 (漱石全集第17巻16頁)

病んで夢む天の川より出水かな (漱石全集第17巻30頁)

最初の句には次の自作解説がある。(漱石全集第17巻16頁)

何という意味かその時も知らず、今でも分らないが、あるいは仄に東洋城と別れる折の連想が夢のような頭の中に這回って、恍惚とでき上ったものではないかと思う。当時の余は西洋の語にほとんど見当らぬ風流と云う趣をのみ愛していた。その風流のうちでもここに挙げた句に現れるような一種の趣だけをとくに愛していた。

これは明らかに「夢十夜」につながる幻想的世界への憧憬である。二つ目の句にある「出水」というのは、漱石が病床にあったところ関東一円を襲った豪雨についての言及であるので身辺雑記的な句であると言えよう。

その他、天文学についての言及としては「星雲説」がある。これは漱石の解説を読む限り、太陽系の起源および地球の起源を説明するカント・ラプラスの星雲説のようであるが、ウォードという社会学者の大著の中で出会った、コスモジェニー（宇宙創造論）という術語からの連想であるので、もっと広い宇宙を扱った宇宙論であるのかもしれない。(漱石全集第17巻21頁)

限りなき星霜を経て固まりかかった地球の皮が熱を得て溶解し、なお膨脹して瓦斯に変形すると同時に、他の天体もまたこれに等しき革命を受けて、今日まで分離して運行した軌道と軌道の間が隙間なく充たされた時、今の秩序ある太陽系は日月星辰の区別を失って、爛たる一大火雲のごとくに盤旋するだろう。さらに想像を逆さまにして、この星雲が熱を失って収縮し、収縮すると共に回転し、回転しながらに外部の一片を振りちぎりつつ進行するさまを思うと、海陸空気歴然と整えるわが地球の昔は、すべてこれ炎々たる一塊の瓦斯に過ぎないという結論になる。

漱石はこの説を昔学校の先生から教わった説であると紹介しているが、何故彼が宇宙に

について書くかと言えば、自分の死が宇宙の大きさと比して如何に矮小なものであるかを強調したいがためである。彼の言葉では、「物理の原則に因って無慈悲に運行し情義なく発展する太陽系の歴史を基礎として、その間に微かな生を営む人間を考えて見ると、吾らごときものの一喜一憂は無意味と云わんほどに勢力のないという事実気がつかずにはいられない。」

漱石の時代から一世紀経た我々が生きる現在、天文学は猛烈な速度で宇宙についての科学的知見を蓄積しつつある。一番の驚きは、漱石が生きた時代には、アンドロメダ星雲などの天の川銀河の外の銀河系宇宙がオリオン大星雲のような天の川銀河の中の散光星雲などとまだ明確に区別されていなかったという事実である。アンドロメダ星雲などの系外宇宙が太陽のような恒星を数千億個も含む星のシステムであって、ガスやちりの塊である「星雲」ではないと最初に気づいたのはローウェル天文台のスライファー (Vesto Slipher) (1922 年から 1926 年にかけて) であり、その知見を発展させて宇宙の膨張を定式化したのはウィルソン天文台の 100 インチ望遠鏡を使ったハッブルで 1929 年のことだった。したがって、漱石が「星雲」という言葉を使う時、宇宙では何十億光年も離れたところにある銀河系宇宙が猛烈な速度で我々から遠ざかっているなどという事実は知る由もなかった。彼が引くカント・ラプラスの星雲説は太陽系の生成説としては今日の知見に照らしてそれほど的外れではないが、宇宙についての我々の知識はここ一世紀足らずで膨大に膨れ上がったのである。

注

1. 『平凡社世界大百科事典』 宮本馨太郎による「電灯」の項
2. 例えば、Bob Mizon の *Light Pollution: Responses and Remedies* は一般読者向けにアマチュア天文家書いたものである。プロの天文学者はすでに何十年も前に暗い空を求めて国外に逃げ出している。天文学者の池内了は『考えてみれば不思議なこと』(2004) の中で世界のどこからでも携帯電話を使えるようにするために中継基地として静止人工衛星を多数配備する計画に異議を唱えている。そのような計画が実現されれば宇宙からの微弱な電波を捕らえることで成り立っている電波天文学が死滅すると警告する。彼の次の発言には共感を感じる: 「宇宙からのメッセージを聞くような真に文化的な営みを二の次にして、金儲けを優先するような人類に未来はあるのだろうか、と問いかけていこうと思っています。」
3. http://homepage1.nifty.com/BACK_YARD/index.htm に掲載された。
4. 同上。
5. *Emu in the Sky: Stories about the Aborigines and the day and night skies*, 『星座ガイドブック 秋冬編』 p274
6. 『漱石と異文化体験』 p74

参考文献

池内 了『考えてみれば不思議なこと』晶文社, 2004

夏目漱石『漱石全集』岩波書店, 1979

藤井 旭『星座ガイドブック秋冬編』誠文堂新光社, 1977

藤田榮一『漱石と異文化体験』和泉書院, 1999

『平凡社世界大百科事典』平凡社, 1981

D'Arcy, Peter, ed. *Emu in the Sky: Stories about the Aborigines and the day and night skies*, The National Science and Technology Centre, Canberra, Australia: 1997

Mizon, Bob *Light Pollution: Responses and Remedies*, Springer-Verlag, London: 2002

“Sky and Telescope”, Sky Publishing Corporation, Cambridge MA.